

OG訪問

PSW(精神科ソーシャルワーカー)が運転する焼きたてパンを満載したバンを追いかけ始めた今回のOG訪問。看護師として働いた後、本学に編入学、現在はボーダーレスな活躍を繰り返す多才なPSW・小畑さんをご紹介します。

社会福祉法人さっぽろひかり福祉会 ひかり工房 副施設長

小畑 友希さん (1997年看護福祉学部医療福祉学科
医療福祉専攻(現臨床福祉学科)卒業)



■ スーパー・ソーシャルワーカー

午前10時、取材班を迎えてくれた直後にバンを駆って配達に向かった小畑さんは、札幌市東区「ひかり工房」の副施設長を務めるPSW(精神科ソーシャルワーカー)です。「ひかり工房」は「(社福)さっぽろひかり福祉会」が精神障がい者の所得保障と就労支援を目的に運営するパン屋さん。精神障がいや発達障がいのある当事者が製造・販売部門で35名、職員としても4名働いています。小畑さんは全員の個別支援計画の作成、管理、日常的フォロー、個人面談、働きやすい環境づくりというPSWの役割を全て担うほか、抜群の営業センスを発揮して適正価格での販売や商品デザインにも貢献しています。もちろん、必要に応じて納品や製造も行います。さらに、商品開発、市内の大学デザイン学科とのコラボによる「ひかり工房」ブランド開発・デザインプロジェクトを手がけるほか、各地から舞い込む講演依頼に積極的に応える、人気スピーカーでもあります。



この日の午前には市内3カ所に納品。札幌・地下鉄大通駅コンコース内「元気ショップ」に並ぶひかり工房のパンやクッキーは30アイテム以上。売り場で目を引くプライスカードは小畑さんの手書きです。

■ 「働けない」を越えてみる

ひかり工房がめざすのは当事者が働き、収入を得て自立すること。小畑さんは「障がいがあるから働けないではなく、働くことを前提に支援を考えます。当事者と一緒に関わりようになり、人と

して生きることから“働く”ことははずせないと強く思うようになりました」と、ハード、ソフト両面から働き続けられる職場環境づくりを進めてきました。職場内の細々したトラブルや困りごとをPSWの目でしっかり見守りつつも介入は必要最小限にとどめ、自分たちで問題解決する力がつくよう関与しました。「世話を焼くのではなく、当事者同士が支え合う仕組み作り、維持が私の仕事ですから」。小畑さんが担当しておよそ8年。工房は各人が責任をもって仕事をし、ベテランが新人に教え、困ったときは相談し合う、ごくふつうの職場として自律しています。

■ 「ちょっと上」コーチング

「持っている能力の10%しか出せていないと思う人がほとんど。その分伸び代が大きいんです」と、小畑さんは当事者に対し、少し高めでも越えられるハードルを設定します。クリアできた自信の積み重ねで潜在能力発掘をねらうのが小畑流コーチングです。金曜日の朝、工房で働く若者の母親から「疲れているので休ませます」と電話があっても、「そうですね、お大事に」とは言いません。「金曜日はみんな疲れているんです。遅れてもいいから出てきてくださいね」と返すのが小畑さん。前日までの様子をきちんと見ているからできる厳しさや許容のさじ加減が見事です。

ひかり工房での就労をきっかけに親元から自立し一人暮らしを始めた人、一般企業へ就職を果たした人、成果は続々と出ています。

■ つながり方をコーディネート

小畑さんは医療、行政、福祉関係機関はもちろん、同法人の後援会でもある地元町内会、企

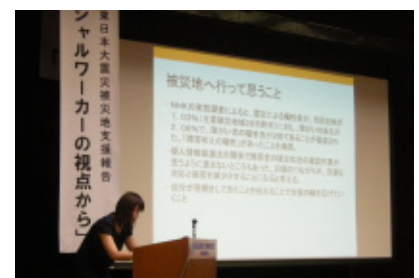


午後はラスクづくりのヘルプ。生き生きした職場から体と心によさしい商品が生まれます。全国的にも注目される、標準より高い平均工賃(賃金)は、障がいの仕事への対価が低く見積もられがちな現状への小さな、でも重い「NO」表明です。

業、教育機関など多彩な組織や人と連携しています。「私一人の力で自己完結したら自己満足しか生まれません。他とつながることでものごとが展開していくところに面白みがあるんです」。小畑さんコーディネイトによるソーシャルワークとビジネスの融合、商品やブランド開発のゆくえが楽しみです。

卒業後15年の本学とのつながりも健在です。臨床福祉学科同窓会会長を務めるほか、同学科精神保健福祉士コース外部講師として、また実習の指導担当として(ひかり工房は現場実習協力施設の一つです)後輩育成にも意欲的です。

ソーシャルワークを核にした八面六臂の活躍に「なんだか仕事が生きがいみたい」と苦笑する小畑さんですが、天職と呼べる仕事を存分に楽しむ生き方に仕事人の潔さを見ました。



東日本大震災では、直後に障がいのある方の被災状況調査に現地入り。7月の「ソーシャルワーカーデー2012」(札幌)でも支援のあり方についてプレゼンしました。